



博雅文库
BOYA WENKU

日语教育与日本学研究

——大学日语教育研究国际研讨会论文集（2011）

主编 / 刘晓芳



华东理工大学出版社



日语教育与日本学研究

——大学日语教育研究国际研讨会论文集(2011)

主編／刘晓芳



华东理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学研究——大学日语教育研究国际研讨会论文集(2011)/刘晓芳主编.
—上海:华东理工大学出版社,2012.4

ISBN 978-7-5628-3209-6

I. 日... II. 刘... III. 日语-研究-文集 IV. H36-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 007854 号

**日语教育与日本学研究
——大学日语教育研究国际研讨会论文集(2011)**

主 编 刘晓芳

责任编辑 / 朴美玲

责任校对 / 张 波

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

社 址:上海市梅陇路 130 号,200237

电 话:(021)64250306(营销部)

(021)64252001(编辑室)

传 真:(021)64252707

网 址:press.ecust.edu.cn

印 刷 / 常熟华顺印刷有限公司

开 本 / 787mm×1092mm 1/16

印 张 / 29.75

字 数 / 856 千字

版 次 / 2012 年 4 月第 1 版

印 次 / 2012 年 4 月第 1 次

书 号 / ISBN 978-7-5628-3209-6/H·1168

定 价 / 198.00 元

(本书如有印装质量问题,请到出版社营销部调换。)

前 言

“2011年日语教育与日本学研究国际研讨会”于2011年5月20日至22日在同济大学隆重召开。此次研讨会由教育部大学日语教学指导委员会主办,同济大学外国语学院、新世界教育集团、华东理工大学出版社共同承办。在21日上午的开幕式上,同济大学外国语学院马秋武院长和教育部大学日语教学指导委员会主任陈俊森教授分别代表主办方致开幕词之后,原北京大学教授、九州国际教育学院理事长孙宗光先生、卡西欧上海贸易有限公司岩丸阳一副总经理、新世界教育集团许纬总裁、华东理工大学出版社张辉副社长等发表了热情洋溢的贺辞。来自东京外国语大学的姬野昌子名誉教授和来自早稻田大学的川口义一教授分别为本次研讨会做了精彩的基调演讲。

本次研讨会旨在为国内外教学和研究人員提供相互交流切磋的平台,共同就如何推进日语教育与日本学研究的评价理念等进行深入的学术交流,共有来自海内外日语学界知名专家以及各高校日语系师生、学者近200人与会。在21日下午和22日上午的分组讨论会上,共设立了9个分会場,分别围绕日本语教育、日语语言、翻译、古典文学、文学和日本文化、经济等话题展开了热烈交流和深入讨论。本次研讨会特设的研究生专场,也获得了大家的一致好评。

本次研讨会还有一个对于上海乃至全国日语界都意义深远的事件,那就是“中国日语教学研究会上海分会”的成立仪式和学刊《日语教育与日本学》的首发仪式。日本国驻上海总领事馆首席领事平木场弘人、中国日本语教学研究会会长修刚教授和同济大学外事办李振宇主任共同参加了上海分会成立的揭牌仪式。江苏分会的同仁们的到会祝贺,北京大学赵华敏教授、日本东北大学小野尚之教授的精彩致辞,为本次研讨会画上了圆满的句号。本次研讨会还得到了北京大学出版社、外语教学与研究出版社、高等教育出版社等单位一如既往的支持。

本论文集是在与会者参加了研讨会的分组发表的基础上,从100多篇投稿论文中精选出来的优秀之作,并经过论文集编委会的认真审阅之后由华东理工大学出版社陈勤老师汇编而成。作为本次研讨会的具体成果体现,我们希望能继续得到各位专家的指正,也希望以此凝聚更多日语教育与日本学研究的力量,共同为我国日语界的繁荣和发达尽一份力。

《2011年日语教育与日本学研究国际研讨会论文集》编委会
中国日语教学研究会上海分会
2011年11月19日

目 录

日本語教育

中国人日本語学習者のディクテーションに見られる複合的な問題点	任 星(1)
「Can-do Statements」を用いた教材開発および授業デザイン	
——中国の大学における日本語専攻生向けの初級総合日本語教材「新界標日本語」を例に	乔 颖 徐敏民 彭 瑾(6)
中国語母語話者による「テイル」形の意味の学習ストラテジー	
..... 孫 猛 玉岡賀津雄 宮岡弥生 小泉政利 安永大地	(10)
中国上海 大学生(日本語専攻)就職現状と意識調査	
——五大学の資料から	陆留弟(14)
実践的なコミュニケーション能力を育成する教育方法	
——インタビュー・トレーニングのケース	劳秩琛(21)
ドラマ視聴の中で「気づき」を促す指導の提案と検証	张文丽(30)
ビジネス日本語教育に関する再考	
——「ミドルビジネスリーダー」の育成に向け	邓 蓉(34)
初級会話授業における誤用訂正に対する意識	
——日本語教師を中心に	闻 艺 唐晓煜(38)
关于财经方向复合型日语人才培养的思考	朱卫红 尤东旭(43)
关于我国高校日语教育的思考	
——基于长三角地区日资企业日语人才需求现状的调查	周 军(47)
关于中国大学生对日语称赞的应答方式的调查与分析	
——以技能称赞为中心	周桂香 闻 艺 孟庆荣 李 贞 刘 芳 刘俊民(51)
会話における「依頼・申し出表現」の指導法の試み	
..... 王宝锋	(56)
句子改错题型的导入和评价及学习者习得情况分析	曹红荃(62)
来自教学第一线的语法探讨	
——时间名词后格助词「に」的使用情况	李菁菁(66)
利用电子化语言资源辅助日语教学的实践研究	卜朝晖(71)
面向跨文化交际的日语教学的研究——思维模式的导入	沈 悦(75)
日本文学课的研究型教学模式探索与实践	李光华(77)
日本語教育に対するマルチモーダル教授法の一考察	
——任務教授法を中心に	姚伟杰 王保田(81)
日本語母語話者と中国人日本語学習者の小集団討論における修正の比較研究	
..... 孙 莉 赵 刚	(84)
日本語能力試験複合辞の出題トレンド	
——1級文法部分を中心に	张北林 李光赫(89)

日本語学習者の応答表現「いいです(いいですよ)」の使用実態報告

——JFL 学習者のロールプレイ会話データを用いて 塔娜(タナ)(93)

日语教学方法再认识 王 英(98)

谈日语专业的跨文化交际学课程的教学 方 萍(101)

听解语篇结构解析与听力指导

——基于日本语能力测试一级语料 张 颖(105)

小集団討論における同時開始の日中対照研究 贾 琦(112)

也谈教学实践中的ノダ 戴宝玉(116)

以主体间性理论构建《日本概况》课程教学 赵 霞(122)

中国における中等日本語教育

——上海市甘泉外国語中学校日本語教育の実践について 张 婷(127)

日本語学

中日両言語における指示詞の認定、体系について 南京工业大学 钱爱琴(134)

「～しようとする」のアスペクト性と人称制限に関する一考察 李东哲(138)

「つもりだ」と「気だ」のモダリティ性について 张伟莉(142)

「怖い」と「恐ろしい」の使い分けについて

——対象から見る 孙爱妮(146)

オノマトペの情感性と母音分布について

——ABAB型を中心に 唐晓煜 李 捷(151)

ノデ節における認識のモダリティ形式の分析 徐淑丹(155)

動詞他動性と動態静態表現に関する中日認知比較研究 黄春玉(158)

動名詞述語文研究

——格構造を中心に 唐千友(161)

対極性を表す「不」の意味の強弱について 邹善军 赵圣花(165)

共感覚に基づいた形容詞の分析 赵圣花 邹善军(169)

关于系统功能语言理论框架内的“及物”和“作格”概念的再探讨

——通过分析日语中的“作格”现象重新定义“作格性” 惠 婷(173)

「焦る」と「慌てる」の類義分析 朱薇娜(180)

考察日语「NPを+V」句与汉语“把字句”的异同 金镜玉(184)

日本語複合動詞の語彙意味論的分析 小野尚之(188)

日本語の複合動詞「V1-果たす」の二つの用法について

——「行為の完遂」と「任務の達成」 杉村泰(192)

日語的“左分支”特征 李 波(196)

日中両言語における躊躇語についての一考察

——「あのう～」と“就是说……”を中心に 黄爱民(200)

事態連続表示文の日中対照研究 李光赫 张北林(204)

試考察表示推量的「だろう」与“吧” 阳贝壳(207)

文の成分か節か

——規定構造を持つ単文と複文の見分けについて 沈书娟(211)

応答発話行為前提の意味公式の語用論的性格

——断りがおかれた強い対話に着目して 杨久成(218)

中国語におけるアルファベット表記語について

- 日本語と比較しながら 徐秀姿(222)

日本語における主観と客観の比較研究

- 「カラ」と「ノデ」の因果関係 郑爱军(226)

日本文学

重返奥兰

- 性別視閥下的《厨房》解读 李莲姬(230)

- 「自讃談」章段の構想からみる清少納言の美意識 李晓梅(234)

驕る猫、鬪られる犬の結末

- 島崎藤村「家畜」と夏目漱石「吾輩は猫である」の同時代的読みの試み
..... 木村陽子(238)

- 论田村俊子的代表作《生血》 李先瑞(242)

浅析俳句中的无理之妙

- 兼谈俳句的翻译 李 旭(246)

- 试论大江健三郎《万延元年的足球队》的知识分子视角 兰立亮(250)

漱石作品における人間対立

- 『坊っちゃん』を中心に 吴少华(255)

天吾の父親は誰なのか

- 村上春樹『1Q84』における父親像について 赵立男(259)

- 王朝文学兴盛的语境新读 顾伟坤(263)

- 隐喻与悖论:小说《地狱变》“艺术至上”主题的叙事学分析 李东军(267)

『藪の中』構造を読む

- 主題へのアプローチ 刘绍晨 肖 宏(273)

从异域之眼看唐代传奇

- 以《任氏怨歌行》为引子 李宇玲(277)

岛村抱月文艺思想研究

- 考察《被囚禁的文艺》 余祖发(282)

- 谷崎潤一郎の読んだ中国近代文学 崔海燕(286)

- 简评简井康隆的《文学部唯野教授》 钱剑锋(289)

- 叛逆与责任:大江健三郎文学的独特理念 雷慧英(292)

- 论永井荷风初期作品《烟鬼》的创作风格及小说中的上海文化元素 钱晓波(298)

- 日本近代小说《不如归》中的疾病、美与身体 杨文瑜(304)

作为一种反思的“上海体验”

- 浅析堀田善卫文学思想的形成与发展 章 霞(311)

太宰治「猿ヶ島」論

- 「弱者」太宰の強さ 李 捷 闻 艺(318)

日本文化

- 日本の年中行事における「無中生有」について 洪伟民(323)

- 《大日本史》中的中国要素 邢永凤(332)

- 安倍晋三の「美しい国」について 徐家驹(338)

不一致応答における同調性について	王玉明	孟庆荣(343)
从日语谚语的词汇表达看日本人的自然观	牟海涛	(347)
日本媒体的中国形象之建构		
——以“毒饺子事件”的报道为中心	张京品	(350)
日本企業文化から見る東洋と西洋企業文化の融和		
.....	江春华	韩冰(355)
最近の日本 EPA 交渉の動向と農業問題	张建	(359)
透过「ことわざ」看日本人的经济观	王凌	(363)
中国語母語話者の不満表明行為について		
——社会要因による使用傾向	罗琳	任星(371)
無縁社会と日本企業の社会的責任	胡娟	(376)
物事を決める話し合いの「不同意コミュニケーション」における「配慮」		
——日本語母語話者と日本語学習者の談話資料の分析から	金桂英	(380)
海外情報の入手における阿蘭陀通詞の役割	邱兰芳	(384)
福泽谕吉の海外游历与其中国观的形成	孙攀河	(389)
日本商社的发展历程和前景	沈珺君	徐曙(403)
中国经济新趋势与商务日语跨文化能力培养	潘幼芳	(410)

翻訳理論と実践

从语义到语用的认知视角探讨汉日翻译中的失误及应对措施	赵康英	(416)
浅谈日语嵌入式复句的翻译技巧	张秀梅	(421)
日文歌曲译配在日汉翻译教学中的应用	金中	(426)
訳者主体意識としての翻訳		
——『羅生門』の中国語訳の比較を通して	孟庆荣	(429)

院生論文

中日语言中幽默要素的可译性与不可译性	须军	(433)
『日本永代蔵』からみられる井原西鶴の二重身分観念		
——「商」に関する描写を中心に	郑丹	(438)
勅撰三集の詠雪詩に関する一考察	梁奕华	(442)
从《满韩处处》看漱石的中国观	张羽	(446)
汉日量词的对比分析及其翻译方法的考察	欧慧娟	卜朝晖(450)
日本ドラマの中国語訳から見る中国語新語の使用状況		
——日本ドラマ『SPEC』を例に	夏婧	(455)
外来語「ザ」をめぐる	练琼	(459)
形式名詞としての「点」の用法について	夏海凤	(464)

中国人日本語学習者のディクテーションに見られる複合的な問題点

任 星
(厦门大学)

1 はじめに

自然な音声をどのように聴き取るかを調べる方法にディクテーションが挙げられる。ディクテーションは音源からの音が、聴覚系、知覚系を経て何らかの音声として認識され、さらに運動系を経てその音声は文字となって表出されるという過程を辿る(西端1998)。

本稿は中国人日本語学習者(以下学習者)を対象にディクテーションを行い、聴覚的認知の特徴とディクテーションに見られる複合的な問題について探ったものである。

2 実験計画

本実験では、学習者の単語レベルおよび文レベル^①における聴取状況とアクセント型の影響を調べ、特徴と問題を抽出し、その要因について考察する。その際、以下の3点に注目して分析する。

- 1) 特殊拍の有無判断が正しくディクテーションできたか。
- 2) 特殊拍に後続する子音が正しくディクテーションされたか。
- 3) アクセント型の違いによって、ディクテーションの誤りに差があるか。

3 刺激音

刺激音は、日本語自然言語音の「タータ」「タンタ」「タッタ」「タタ」を使用した。また、アクセント型は平板型と頭高型に限定した。実験の内容は以下のように2つの部分に分かれている。

単語レベル：刺激音のみのディクテーションである。

文レベル：刺激音をキャリアセンテンス「これは_____と読みます」に入れた。なお、ディクテーションは刺激音のみとする。

4 被験者

表1 被験者

被験者②	男性(名)	女性(名)	合計(名)
I グループ	5	5	10
II グループ	0	10	10

① ここでいう「文レベル」はキャリアセンテンスのことである。

② I グループ：日本語学習歴1年、II グループ：日本語学習歴2年、III グループ：日本語学習歴3年以上。

(续表)

被験者	男性(名)	女性(名)	合計(名)
Ⅲグループ	3	7	10
合計	8	22	30

被験者は全員中国吉林省出身(北方方言話者)①で、日本滞在歴はない。

5 結果と考察

図1は被験者全体及び刺激音全体の誤聴の傾向を示したものである。単語レベルでは、平板型に誤聴が多く見られ、頭高型の2倍以上にも上っているが、文レベルでは、その差は大きくはないものの、平板型とは逆の結果となっている。

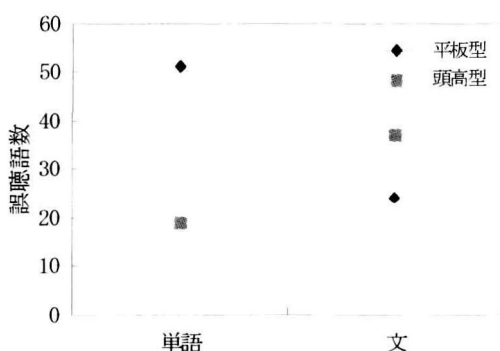


図1 全体の誤聴語数

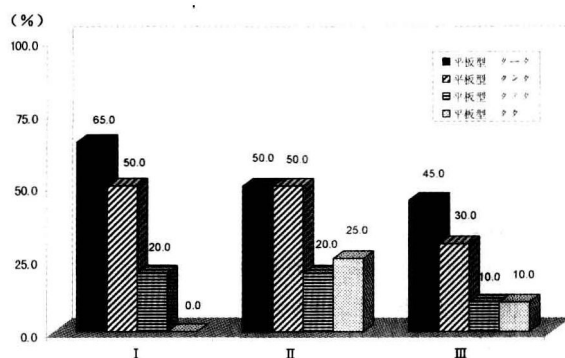


図2 平板型全体の誤聴率

図2は平板型全体の誤聴率を示したものである。全体的に被験者の日本語能力に関係なく、「タータ」と「タンタ」の誤聴率が高い。また、日本語能力が上がるにつれ、誤聴率が下がっている。うち、「タータ」(長音)の誤聴が最も目立っていることが分かる。長音はⅢグループにおいても聴取が困難であることが確認できる。その次に目立っているのは「タンタ」(撥音)である。「タッタ」(促音)においては長音・撥音に比べ誤聴はそれほど多くはない。「タタ」においてはⅠグループが全員正解を出しているのに対し、Ⅱグループでは誤聴率が25%にも及んでいる。また、Ⅲグループでも促音と同様の誤聴率を占めている。

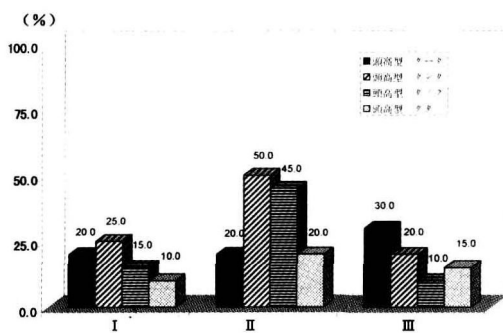
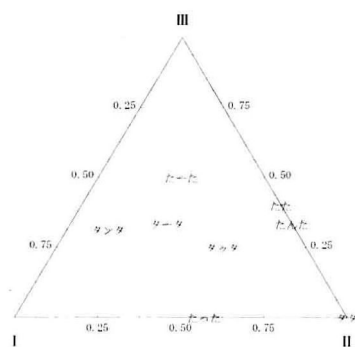


図3 頭高型全体の誤聴率

図3は頭高型全体の誤聴率を示したものである。ここでは誤聴がⅡグループに特に目立っていることが分かる。「タンタ」と「タッタ」は誤聴率がかなり高い刺激音となる。また、2語ともⅡグループに誤聴が多く見られる。平板型で誤聴率が最も高かった「タータ」はⅢグループには依然として誤聴の多い刺激音であるが、ⅠグループとⅡグループではそうっていない。ⅠとⅡでは「タンタ」に誤りが多いことが分かる。また、「タタ」はここでもⅡとⅢの誤聴率がⅠより高くなっている。

① 母方言の違いによる影響を避けるため、被験者を同一方言話者に限定した。



[平板型: 片仮名, 頭高型: 平仮名]

図4 単語

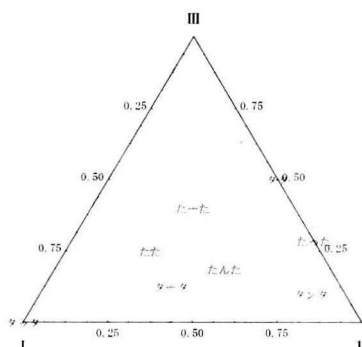


図5 文

図4と図5は、全ての刺激音の誤聴傾向を三角グラフ①に示したものである。図4は単語レベルの結果であるが、「たーた」「タータ」「タッタ」が三角形の中央部に位置することが確認できる。これは被験者の日本語能力に関係なく、この3つの刺激音に対して、誤聴の多いこととなる。特に、長音に関しては、アクセント型を問わず誤聴が多い。図5の文レベルの結果をみると、ここでも長音は誤聴の多い刺激音となっている。つまり、学習者にとって、長音の聞き取りは他の刺激音に比べ、難しいことが分かる。

表2 ディクテーションに見られる複合的問題点

		単語								文							
		平板型				頭高型				平板型				頭高型			
被験者		タータ	タンタ	タッタ	タタ	タータ	タンタ	タッタ	タタ	タータ	タンタ	タッタ	タタ	タータ	タンタ	タッタ	タタ
I	1		\$														
	2	! *		# *				# *		(~				! *	&		
	3	! *	&			! *				&	"\$			! *	" *		& *
	4	! *	" *					# *		\$~ *					&		
	5	! *	" *											! *			
	6	! *	" *														
	7	%	"%					# *				#			& *		
	8	! *	%~							&(~					"		(
	9	! *	%~														
	10	!%	"%	# *								%~					

① 図4、図5の三角グラフはSTATISTICA(5.1J)によって作成したものである。三角グラフは3つの要素(X,Y,Z)の相対的な比率(%)を示すのに使用される。X,Y,Zの3つのデータセットの値を0から1までの比率で表現するため、入力したデータは百分比に変換される。

(续表)

		単語								文													
		平板型				頭高型				平板型				頭高型									
被験者		ター	タ	ン	タ	タ	ター	タ	ン	タ	タ	ター	タ	ン	タ	タ	ター	タ	ン	タ	タ		
Ⅱ	1	!	ゝ								!	ゝ					\$	”					
	2	!	ゝ							#	ゝ						%			%	ゝ		
	3	!	ゝ								&			&					&	#			
	4	!	ゝ	”	ゝ			&						&					&	#	ゝ		
	5	!	ゝ			#	ゝ	&				(		\$	ゝ	”%				#	ゝ		
	6	!	ゝ			#	ゝ				#	ゝ			\$	ゝ			”	ゝ			
	7					#	ゝ				(				\$	ゝ			”	ゝ			
	8														\$	ゝ			”	ゝ			
	9	!	ゝ	”	ゝ				(		#	\$			&(	ゝ		&	!\$	&	#	%	
	10					#	\$			(		\$	ゝ	ゝ	\$			\$		\$		\$	
Ⅲ	1	!	ゝ																				
	2	!	ゝ	%	ゝ						\$	ゝ					!			#	ゝ		
	3	!	ゝ														\$	ゝ					
	4	!						”	ゝ		(	\$	ゝ	”			%	!	\$	%	ゝ	&	ゝ
	5	!		\$													\$		&				
	6				%	ゝ			\$	ゝ													
	7			%	ゝ																		
	8	!																	\$				
	9	!	ゝ	”																			
	10	!	ゝ	”		#			\$	ゝ							!						

! 長音ー① " 撥音ー # 促音ー \$ 長音+ % 撥音+
 & 促音+ ~ 4拍 ゝ 濁音 (その他 _ 違う種類の特殊拍

表2は被験者個人別のディクテーションの結果を示したものである。ディクテーションの間違いには単に特殊拍を聴き取れていない問題だけではなく、複合的な問題があることが分かる。特殊拍の増加や脱落の問題だけでなく、清濁による問題もかなり見られる。特に、特殊拍に後続する子音(清音)を濁音にディクテーションされる問題が目立つ。清音は出現する位置によって、異なる音声的特徴を持っている。しかし、現場での音声指導は、通常カナ文字にかなり影響され、発音が同様であると教える場合が多い。学習者は異なる音と聴き取れてはいるものの、その違いがわからず、濁音でディクテーションしていると思われる。このことから、学習者はC₂②の音声的特徴によって、特殊拍の有無を判断していると考えられる。

6 おわりに

本稿では中国人日本語学習者におけるディクテーション上の複合的な問題について探った。その結果、単に特殊拍を聴き取れていない問題だけではなく、特殊拍に後続する清音を

① 「ー/+」: 特殊拍がある刺激音を特殊拍なしに、或いは特殊拍がない刺激音を入れて聴き取ったことを示す。

② CVCV 構造場合、2番目のCである。

濁音としてディクテーションされる問題が目立っていた。また、特殊拍に後続する子音の音声的特徴によって、特殊拍の増加や脱落が起こることが明らかとなった。アクセント型の違いによる影響では、単語レベルでは平板型が頭高型より誤りが多く、文レベルでは逆に頭高型に誤りが多いことが確認できた。

最後に、特殊拍を教える際、促音・長音の時間的長さだけを強調するのではなく、それに後続する子音の音声的特徴にも十分配慮が必要であることを音声指導への提言としておきたい。

参考文献

- [1] 内田照久. 1993. 中国人日本語学習者における長音と促音の聴覚的認知の特徴. 教育心理学研究, 41 (4) 日本教育心理学会: 414-423.
- [2] 戸田貴子. 1998. 日本語学習者による促音・長音・撥音の知覚範疇化. 文藝言語研究: 言語篇. 33, 筑波大学文芸・言語学系: 65-82.
- [3] 戸田貴子. 2003. 外国人学習者の日本語特殊拍の習得. 音声研究. 7-2, 日本音声学会: 70-81.
- [4] 西端千香子. 1998. 日本語促音の聴取と発音に関する研究—中国語母語話者を対象として—. 広島大学教育学研究科博士論文: 42-52.

「Can-do Statements」を用いた教材開発および授業デザイン ——中国の大学における日本語専攻生向けの 初級総合日本語教材「新界標日本語」を例に

乔颖 徐敏民 彭瑾

(华东师范大学)

1 はじめに

2010年は日本語教育が大きな転換期を迎えた年であったが、中でも最も注目されたのが、国際交流基金が「相互理解のための日本語」という理念のもとに、2005年より開発に取り掛かり、5年をかけて開発した「JF 日本語教育スタンダード2010」(以下、JF Standard)である。JF Standardは、日本語の教え方、学び方、そして学習成果の評価の仕方を考えるためのツールである。この中では、まず、日本語を使って何がどのようにできるのかという新しい日本語教育が育成する日本語能力の把握方法が示されている。JF Standardの最大の特徴は、日本語の熟練度を「～できる」という形式で示していることであり、これを「Can-do Statements」、或いは「Can-do List」(以下、Can-do)と呼んでいる。「Can-do」は従来のような、どのような文型や文法を知っているのか、単語や漢字をいくつ知っているのかといった熟達度を尺度とするものとは異なり、たとえば「好きか嫌いかを述べることができる」「電子辞書など、新しく買った物について友人に話すことができる」と言ったように、言語の熟達度の各段階別に、その能力でできる言語活動の例を示し目安とするものである(JF 日本語教育スタンダード2010利用者ガイドブックより)。

こうした「JF Standard」や「Can-do Statements」の開発は日本語教育に対する新しい時代のニーズを反映したものであるが、ではそうしたニーズに真に合致する日本語教育とはどのようなものなのだろうか。残念ながらそうした検討は、これまで各々の教師が個々の経験を通じてぼんやりとは把握していたにせよ、お互いに共有するところには至らなかった。そうした反省に基づき、新しい時代の日本語教育の形をより明確にするために、2010年夏から、華東師範大学日本語学部、そして日本横浜国立大学留学センターと共同で「Can-do Statements」を基盤にした、中国の大学における日本語専攻生向けの初級総合日本語教材「新界標日本語」の開発プロジェクトを立ち上げた。

2 「新界標日本語」教材開発の理念と目標

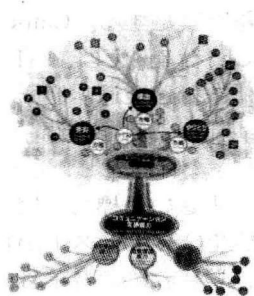
2.1 「新界標日本語」

- ◇上海普通高等教育「九五」重点教材「基礎日本語」1～4冊(復旦大学出版社)の姉妹編
- ◇中国大学日本語専攻生向け初級段階用総合日本語教材
- ◇横浜国立大学留学生センターの日本語教育に携わる専門家と共同編集、開発したもの
- ◇開発の段階で、遠隔通信技術を用いて、華東師範大学日本語学部一年生の学習者を対象にテスト授業を行った
- ◇「運用能力」の育成を目標とする「Can-do」を軸にした教科書構成

2.2 「新界標日本語」の理念と目標

これまで中国の大学における日本語専攻生用の教科書は、ほとんど文法シラバスによるものであった。そのため、仮に語彙や文法形態などの知識を教科書から大量に得ても、学習者が実際の場面でうまく運用できなかつたり、コミュニケーション能力の養成の点での不備が指摘されてきた。「多様化する日本語人材の需要に向けて堅実な日本語能力と充実した文法知識をもった人材の育成が今後の中国大学専門日本語教育、中国大学専攻日本語の基礎段階の目標」(高等院校日本語専攻基礎段階教育大綱より)であるが、しかしその「日本語能力」なるものが一体どういう能力であるかということが、非常に不明瞭であるということもまた事実である。

「JF Standard」は、「相互理解のための日本語」を理念としている。この「相互理解」のためには、日本語を用いて何が、どのようにできるのかという「課題遂行能力」、そして様々な文化に触れることで視野を広げ、他者の文化を理解し尊重することのできる「異文化能力」が必要不可欠である(JFスタンダード試行版より)。このような問題意識から、「JF Standard」では「コミュニケーション言語活動とコミュニケーション言語能力」との関係を、以下のような一本の桜の木に準えた。



「コミュニケーション能力」をめぐる様々な考え方があるが、「JF Standard」の木では、語彙、文法、発音、文字、表紙などの「言語構造能力」、そして相手との関係や場面に応じていろいろなルールを守り言語を適切に使用する「社会言語能力」、さらに談話を組み立てたりコントロールしたりする「語用能力」を重視している。

「言語能力」は実際の言語使用場面においては言語活動として表れるが、「JF Standard」ではその活動例を「聞く」「読む」などの受容活動、「一人で長く話す」「書く」などの産出活動、及び「会話」や「手紙のやり取り」などの相互行為活動(以下、「やり取り活動」)の3つに分類した(JFスタンダード試行版より)。

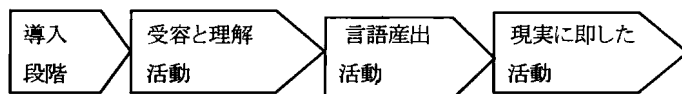
そしてJFスタンダードによる「日本語能力観」の基本理念に基づき、新しい日本語教材の方向性として、次のような教材開発目標を立てた。

1. 「聴解、会話、読解、作文」の各科目間の連携を図り、本当の意味での総合的な教材を目指す初級教科書
2. 従来の文法文型教育中心の授業ではなく、「日本語を使って何がどのようにできるか」という新しい能力観に基づく教科書
3. 各課において、教師と学習者が共有できる明確な目標の見える教科書
4. 評価は教師一方向で下すものでなく、チェックリストによる自己評価も常に行える教科書
5. ポートフォリオで学習過程を追跡し、「学び」が可視化できる教科書

3「新界標日語」の内容構成及び練習問題の設計

3.1 教材の構成

従来の「精読」教材は、発音・文字・語彙・文法などの習得を目標とする授業である。特に、基礎段階である1、2年生の時は、「精読」授業が全日本語授業数の約3分の2を占め、最も比重の大きい科目でもある。そのため初期の精読教材は文法、文型の学習を主な目的として、口頭練習を想定した会話文が多いという特徴がある。しかし、コミュニケーション能力を身に付けるためには文法だけでは外国語でスムーズにコミュニケーションできるようにならない。「新界標」では、前述した「JF Standard」がコミュニケーション能力の3つの領域、すなわち、文法能力、社会言語能力、談話能力を養成する授業を想定した上で、次のように各課を構成している。



◇導入段階:「学習目標設定」の段階。教師・学習者が相互理解のために、「言語を用いて何ができるか」という目指す目標を共有する。Can-doリストから、日本語の使用場面を想定し、具体的な言語活動の課題を設定する。Can-doリストでは、日本語教育の現場で使用しやすい15のトピックを設定している。例えば、「自分と家族」「住まいと住環境」「自由時間と娯楽」「生活と人生」「仕事と職業」「旅行と交通」「健康」「買い物」「食生活」「自然と環境」「人との関係」「学校と教育」「言語と文化」「社会」「科学技術」などである。わたしたちは教科書を作る際に、まずこれらのトピックを大きな目標とし、さらに実際の授業活動で利用しやすいように言語活動の使用場面を想定した小さい目標も設定した。学習者の各段階の言語熟達度に応じた、具体的な活動(小さい目標)をCan-doリストから選び出す。

◇第二の「理解と受容」の段階では、学習者に学習項目の意味を理解させるために、理解可能なインプットを学習者に大量に与える。この「理解可能なインプット」のなかには、たとえば絵や写真、映像などを用いた例文や、音声や映像化した会話文、読解文なども含まれる。本段階の目的は次の通りである。

- 1)ある言語形式がどのような意味を表すのかが分かる。
- 2)その言語形式の意味、文法規則、使い方などを覚える。

3.2 練習問題の設計

本教科書の第三段階は基本練習による産出の段階である。この段階では、文法練習及び応用練習の2種類の問題を設計している。文法練習は一般にパターン・プラクティスを中心とする練習のイメージがあるが、本教科書ではあえて文型を覚えさせるための伝統的な置き換え練習、順番の並び替えの練習を保留した。これらは一見「形」中心の練習に過ぎないように思われるかもしれないが、中国人学習者の学習習慣を考慮した結果、無理に話させるよりは、まず学習した文型の形を正しく言ったり書いたりできる能力を養成したいという考えから設定したものである。また中国人学習者の中には日本の漫画などのポップカルチャーに惹かれて勉強し始める人が多いことから、イラストをもとにした簡単な文を書かせる練習も設定した。この段階の文法練習は主として短文を作る練習であり、応用練習では、例文を真似して会話文を作成する練習を設定している。

「Can-do」に基づいた学習目標を達成する最後の段階は実際の場面におけることばの産出段階である。これは第三段階で行われた「文型」練習を踏まえて、現実でありそうなコミュニケーションを想定した活動、つまり、学習者が目標を持って自分で意味を考え文を述べたり、聞いたり、読んだり、書いたりする活動を行う。この段階での練習を設定する際、私た

ちは次の点に注意した。

(1) 学習者にとってより身近で、将来出合いそうな場面、役割、タスクを用いる。(「Can-do」参照)

(2) 会話の流れを考えて練習する。(コミュニケーションの流れにそって自分で伝える内容と表現を考える)

(3) 学習者同士で参加する。(ロールプレイ、インタビューなど)

(4) できるだけ実際の場面に近い練習をする。(インターネットで日本語のウェブサイトを見たり、実際に使われる雑誌や広告、ビデオなどを見る)

(5) 学習者一人一人の日本語学習を支援する。(個人化作文の導入)

以上のように、実際の場面に即した活動を中心とする第4段階では、できるだけこの課で学習する文型を使用しつつ、活動の過程で学習者が目的をもってコミュニケーションを行い、会話の流れに沿って自分で表現したり、考えを伝えたりできるよう促す。

4 まとめ

中国では従来「文法積み上げ式」の教科書を使ってきたが、本当のコミュニケーション能力を育成するためには、実際にはこれまで使用してきたような教科書では難しい面も多くある。そうした問題意識から私たちは「日本語を使って何がどのようにできるか」という新しい能力観に基づいた、新しい教科書づくりを目指した。もちろん、Can-doリストの中には、初級文型が全部カバーされていない点、またCan-doが抽象的で分かりにくいというような問題点も指摘されており、Can-do 目標をどう扱うのかという点は今後さらに検討する必要がある。中国では、日本語の言語環境は日本本土と比べて弱いということは否定できない。しかも学習者の分布が広く、教師のレベルも均質ではないという条件の中では、学習リソースの重要一環である教科書の役割がより大きくなると思われる。

このたび私たちが開発した「新界標日本語」は教室用の教科書という位置づけであるが、如何にCan-doという理念を発展させるのか、また教師の教室活動に支援できるのかといった課題については、実践活動の中で学習者の反応やテストの結果などを客観的に踏んだ上で、引き続き検討していく必要がある。

参考文献

- [1] 川口義一. 2009. 「接触場面における会話能力の開発: 表現の個人化」; パネルセッション「接触場面」における日本語能力の開発. 2009年日本語教育学会国際大会. オーストラリアニューサウスウェルズ大学.
- [2] 国際交流基金. 2007. 平成17(2005)年度. 日本語教育スタンダードの構築をめざす国際ラウンドテーブル会議録.
- [3] 国際交流基金. 2009. JF 日本語教育スタンダード試行版.
- [4] 国際交流基金. 2010a. JF 日本語教育スタンダード.
- [5] 国際交流基金. 2010b. JF 日本語教育スタンダード2010利用者ガイドブック.
- [6] 吉島茂・大橋理枝訳. 2008. 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠. 朝日出版社.